

私は「少しでも多くの経験をしたい」という思いから、今回の東京方面企業大学訪問に参加しました。

東京に着いて最初にあった、笹川平和財団理事長の田中伸男氏による基調講演。資源について、教科書では学べない生きた知識を得ることができました。特に、IEA が日本に対して「50Hz と 60Hz を 1 つにしないと大変なことになるぞ」と警告していたのに、実際にそれが実現されず、東日本大震災で大変なことになった、というのが興味深かったです。IEA の助言の的確さはもちろん、すぐに実行することの大切さも感じることができました。また、「福島第一原子力発電所の事故は人災だった」という話にも驚きました。その後の、笹川平和財団・日本財団・ディレクトフォースの皆様とのグループセッション。4 クールありましたが、どの方もしっかりと自分を持っていて、なおかつ国際活動に対する意欲が高く、やはり海外で経験を積んできたからこそ得られるものというのはとても大きいのだと感じました。

はじめにお話を伺ったのは、国際事業企画部研究員の土居さん。仕事のやりがいとして、世界中の色々なところに行ける、大臣から難民まで様々な人と働ける、ということを挙げてくださいました。国際問題について考えたり、自分と向き合ったりするうえで、国や地位が全く違う人々と交流するというのはとても重要なことであると思いました。また、一般の人が教育を受けたり、きれいな水を飲んだりできるように行われている「草の根プロジェクト」についても教えてくださいました。そのような基本的な人権を、国ではない団体が守らなくてはいけない国もあると知り、自分たちは恵まれた環境にあるのだと感じました。「組織などをまとめる際に重要なことは何ですか。」という質問に対しては、「しっかりときくこと」と、端的に教えてくださいました。もし周りの意見を聞かずにどんどん指示を出していったら、自分を信じてついてきてくれる人は誰もいないでしょう。土居さんの言うことは、本当にその通りだと思いました。人の話を聞く機会は普段の生活でたくさんあります。将来を見据えて、今のうちから意識していきたいです。

2 クール目にお話ししてくださったのは、三井物産（株）シニア・プロジェクト・マネジャーの越川さん。様々な製品について値段で日本は中国に勝てないが、日本の製品は質がよいので、中国製を買っていた場合かかったであろう修理費が浮き、結局は日本製のほうが安くなるのだ、という話をしてくださいました。また、日本人は決めたらきちっとやるのだ、ということも教えてくださいました。例えば建物を建てる仕事を任されたとき、タイルが曲がったりずれたりしていたとしても、外国人なら「仕事をやった」と言うだろう。それに対し、日本人はこれで「仕事をやった」とは言わないだろう、と。決して外国の人々を批判するわけではないですが、日本人であることを誇りに思えました。また、インフラ整備の現場で一つ遅れが出るだけで、材料の輸入先や労働者などいろいろなところに影響が出るのだ、という体験にもとづいたことを話してくださいました。現場で働くということの厳しさを感じるとともに、そのような仕事を成し遂げてきた越川さんがいかにすごい人なのかというのを感じました。

3 クール目にディスカッションを行ったのは、日本財団のコミュニケーション部に所属されている和田さん。「幅広い分野で活動されていますが、どれでも共通して大事なことは何ですか。」

という質問に対し、わかりやすい例と共に答えてくださいました。「信号」というのは、みんなが赤なら止まり青なら進むというルールを守っているから役目を果たしている。もし色を無視してみんなが交差点を通るなら、「信号」というものは機能しないのだ。「信号」は人々の『信頼』によって成り立っているのだ、と。確かに、どんな活動もその根本には「信頼」というものがあり、当たり前のように思えるそれがなくなっただけで活動はできないんだなど非常に納得しました。また、外国をみたくえでの銃についての考え方も話してくださいました。もし自分の家から半径何キロにもわたって家や商業施設などがなく、警察に連絡したとしてもパトカーが到着するのは 20 分や 30 分後であるという環境だとしたら自分の身は自分で守らないといけない。そんなときに何もなかったら、身の守りようがない。だから銃はやっぱり必要な、と。私は今まで、アメリカなどで銃の事件が起こるたびに「銃なんて禁止にしまえばいいのに」と思っていました。しかし、国が違えば環境も違い、銃が必要かも変わってくるのだ、ということはこの話を伺ってから初めて考えました。全世界で一概に「こうすべきだ」とは言えず、各国がそれぞれに合った対応をしなければならないのだと思いました。

最後にお話をくださったのは、JLT ホールディングス・ジャパン（株）の山田さん。日本の「言葉で言わなくても通じる世界」は世界的に見るとおかしく、言葉でもって討論すべきだ、と話してくださいました。私はよくテレビで日本のよさを紹介するバラエティ番組を見て、日本って素晴らしいなあと感じることがあります。しかし、日本だからこそそのマイナス面も多々あり、その一つがこの「言葉で言わなくても通じる世界」なのだと思います。討論以外についてもですが、日本人は自分たちの良い面をみて誇りを持つだけでなく、直すべき面を自覚し、しっかり受け止めて改善していくべきだと考えました。また、全体のお話の中で最も印象に残ったのが「日本人は安全と水はタダだと思っている」ということばです。聞いたとき、強い衝撃を受けました。一度、東日本大震災の時に水の大切さは痛感したはずなのに、年月が過ぎ、忘れてしまっています。どちらも、日本にいと当たり前なことであつたことがたさを忘れてしまい、さらなる贅沢をもとめてしまいがちです。安全でしかも水がある、という環境がいかに幸せなことなのかを全国民が再度認識すべきだと思いました。

グループディスカッション全体を通して、普段は聞けないような貴重なお話を聞き、普段は考えられないような問題について頭を悩ませることができました。もう二度とないであろうこの素晴らしい機会に得られたたくさんの生きた声は、きっと私の将来に良い影響を与えてくれたと思います。

同日の夜に行われた、OB・OG との座談会では、元二高生ということで、親近感を持って話すことができました。先輩方はここには書ききれないくらいたくさんの、そしてより実用的なアドバイスや体験談を語ってくださいました。「授業より先に進むことが必要」「1年のうちに勉強スタイルを確立しておくべき」「〇〇生だからというのに惑わされずに自分を貫く」「主体的に勉強する」など、どれをとってもうなずけるものばかりでした。今回とったメモを受験のころにまた読み返して、日々の勉強や進路選択に生かしたいです。

そして、後日あった企業訪問。順天堂大学の天野教授、二高出身、東北大学医学部卒で今は仙台厚生病院で働いていらっしゃる池田先生から貴重なお話をいただきました。

教授は手術直後で時間が限られている中、非常に大事なことをいくつも話してくださいました。メモを取ることができず、覚えていることは数少ないものの印象的な言葉ばかりでした。「成績を上げたければ、机に向ったらすぐに勉強を始めるといい」「自分を犠牲にする覚悟がないのなら医者になってはいけない」「助けることができなかつた方の名前は今でも覚えている」医師の道を目指すか迷っている私にとって、教授からの一言一言はとても心に響きました。そして、質問にぱっと答えている様子から、自己をしっかり持っているんだということや、判断するのが早いのだということがうかがえ、さすが経験を積んできた方だなと思いました。私は手術をしななければならないような病気にかかったことはありませんが、今までにお世話になった医師の方々も強い覚悟をもって診療してくださっていたのかと思うと、感謝の気持ちと尊敬の念でいっぱいです。

池田先生からもたくさんのお話をいただきました。医師を志そうと思ったきっかけは、二高にきた赤十字の方の「私が何時間寝たら人が何人死ぬ世界」という言葉だそうです。その言葉に私も衝撃を受けましたし、将来の方向性が全く決まっていないので、私もそのようなきっかけとなることに巡り合いたいな思いました。また「先生にとって一人前の外科医とはどういうものですか。」という質問に対し、「与えられた環境、患者の臨床背景、社会背景などを考慮したうえで最善の治療を行える外科医」という、詳しくわかりやすい答えをくださいました。求められるのは技術だけでは決してない、という医師の厳しさを感じました。

ほかにも、仙台厚生病院の方には普段見ることのできない施設の様々な場所を案内していただきました。実際に見ることで得られたものがたくさんあり、いい経験となりました。

今回の東京方面企業大学訪問を経て、以前よりも外国や将来に対して様々な見方をできるようになった気がします。学んだことをここで終わりにせず、働くようになってからも頭の片隅に置いておければと思います。内容の濃い二日間でした。